真剣で念能力者に恋しなさい!

あすとろん

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

念能力者を書きたい。

武蔵小杉可愛い。

そんな思いで見切り発車ですが書いてみました。

目次

1話 …… 1
2話 …… 5
3話 …… 13
4話 …… 20
第5話 …… 27

1話

山田太郎。
ＴＨＥ平凡な名前すぎて逆に珍しい部類にまで至った名前である彼。
そんな彼は今、自分が所属している川神学園1―Ｂの教室でとある雑誌を見ながら唸っていた。
「明日は『辻堂さんの熱愛ロード』の発売日。しかし平日、加えて予約を忘れた俺は並ばなければ入手はしばらく先になってしまう…。よし…サボるか…！」
一般的に考えるとアウトなことを宣言する彼。
この若干駄目な雰囲気を醸し出す山田太郎こそこの物語の主人公（笑）である。
そんな明日は仮病を使ってサボることを決めた主人公の頭部にどこかからか平手が飛んできた。
「プレミアムな私が迎えに来たのに何くだらない理由で授業をサボろうとしているのかしら太郎⁉」
「今日日暴力系ヒロインは流行らないよ、お嬢。」
「〜〜〜誰がヒロインですか！誰が⁉」
誰もいない夕方の教室。
そんな教室で一人残る山田。
そして彼を甲斐甲斐しく迎えに来る暴力系ヒロイン（仮）の名前は「武蔵小杉」という。
彼女は山田と同じ川神学園でも本当のエリートだけが所属を許されるＳ組に所属し、入学早々に掌握した才女である。
まあ原作を知っている読者からしたら才女(笑)かもしれないが、冷静に彼女を評価するなら文武両道かつ家が資産家、体の凹凸こそ平均的(規格外が多くいるため目立たない)で見目も整った美少女である。
…性格は色々残念だが。
「まあまあ武蔵さん。山田君がゲームの話をしているのはいつものことじゃないですか。」

「そうだぜ！つーかまゆっちとムサコッスという美少女二人と可愛いマスコットであるオイラが迎えに来るの分かっててエロゲ雑誌広げてるとかどんだけオープンなんだＹＯ!?」
「こら松風！わ、私なんかが美少女だなんて!?」
　武蔵小杉と山田太郎のこの掛け合いはいつものことなのか、同じく山田を迎えに来ていた「黛由紀恵」とその相棒にして馬の人形の九十九神「松風」が二人をなだめる。
　由紀恵は武蔵小杉と同じく１―Ｓに所属している少女である。
　彼女は剣聖黛十一段の娘で自身も凄腕の武士娘であり文武両道、年齢の割に凹凸の激しいスタイルに涼やかな大和撫子然とした美貌を持つ美少女である。
　まあ引っ込み思案な性格のため挙動不審であったり、日本刀を持っていたり、松風…どう見ても由紀恵自身の腹話術による人形を使った一人芝居をするなど割と不思議ちゃんな感じなので友人が極端に少ない。
　どれくらいかというと風間ファミリーという仲良しグループを除けば４人しか友人が登録されていないというくらいである。
　因みに山田自身は割と友人が多く、風間ファミリーの師岡先輩と島津先輩とはよくつるんでいたりする。
「…確かに友人とはいえ年頃のＪＫが来るのが分かっていてエロゲ雑誌を全開なのはデリカシーがなかったな。すまん黛さん、松風。」
　山田は現状を客観的に分析し、確かに自分の行動はアレだと感じ、此処は潔く謝罪するべきと判断したようだ。
　このままでは某童帝のように学校中の女子生徒から汚物の如く見られるポジションに堕ちてしまう。
「い、いえいえ構いません!?わ、私なんて気にせず心行くまで楽しんでください!!」
「まゆっち流石にそれをやっちまったら上級者過ぎるぜ…？」
「あれ？今プレミアムな私のことを無視しなかったかしら？」
「いやそんなことないよお嬢。あ！ところでこのページ見てくれない？荒くれもの数人に捕まって○○と△△に同時に■■されて◇◇顔

している女の子、お嬢に似てない？どうかな？」
「ぎゃあああ!!なんてものを見せるの⁉うわっそんな両方にだなんて…⁉ってそうじゃない!!さっき言っていたデリカシー云々はどこ行ったのよ!!」
　言われるままつい山田の差し出す雑誌のページを見てしまい顔を真っ赤にする武蔵小杉。
　そんな勝気な武蔵小杉が普段見せない恥じらい顔をしているのを見て某２年のハゲのような悟りの表情を浮かべる山田。
　完全な流れ弾でハードエロゲＣＧを見て顔を真っ赤にして目をグルグルさせている由紀恵。
　混沌がここにあった。
　そしてそんな混沌の中、何も知らずにとある男子学生が教室に入ってきたことでさらに悪い方向へ加速する。
「…まゆっちいる？…え？何この状況!?修羅場!?」
　その男子学生の名前は「直江大和」という。
　彼は週末に控える東西交流戦にむけて準備がある者もいるため、本来明日行う予定の金曜集会を取りやめ今日やらないかと風間ファミリーのメンバーに声をかけて回っていたのだ。
　他のメンバーにはメールで連絡したのだが偶々由紀恵の姿を見かけて追いかけてきた大和はこの混沌とした異空間に迷い込んでしまったのだ。流石原作主人公、トラブル体質である。
「あ、どうも直江先輩。イキナリですけどこの女の子どう思います。お嬢に似てませんか？」
「へ？この状況で普通に挨拶してくるのか山田!?…確かに武蔵小杉さんによく似ているなあ、うわあこれはまたドエロイなあってそうじゃない!?息をするように俺まで巻き込もうとするな!!」
「っち。」
「舌打ち!?」
「な!?太郎！何直江先輩にまでソレを見せてるのよ!?辞めなさい!!とりあえずそれを寄こしなさい!?」
「え〝っ!?お嬢、俺が言うのもなんだけど高校生でこのエロゲは少し

上級者向けすぎますよ?それならこっちのマイルドなやつか…どうしてもっていうなら俺といっしょにプレイしますか!?やばいパートは俺が担当しますから。」
「そうじゃない!?プレミアムに違うわ!!どうして同級生の男子と自分に似たキャラが出てくるエロゲをしなくちゃいけないのよ!?」
「はわわ!?武蔵小杉さんちょっとマニアック過ぎませんか!?」
「ｏｈムサコッスさんマジパねえな。」
「プレミアムに誤解よ⁉」
「ニッコリ（無言の悟り顔）」
エロゲ雑誌を片手に顔を真っ赤にして叫んでいる武蔵小杉。
同じく顔を真っ赤にしてチラチラと顔を隠した指の隙間からエロＣＧをガン見している由紀恵。
そんな二人をみてロリコニアを見つけた某ハゲようなアルカイックスマイルを浮かべる山田。
そしてそんなある意味修羅場の方がマシな状況を眺める大和。
「…まゆっちは今日は欠席だね。じゃあ友達と仲良くネ！」
大和は軍師としてこの死地から戦術的撤退を選び教室の扉を閉めるのであった。

2話

「へーそんなことがあったんだ。」

モロ、本名師岡卓也。

風間ファミリーの一員で「モロ」の愛称で呼ばれている漫画やアニメ、ゲームなどに詳しいオタク系男子である。

「ああ。ういえばモロは山田と仲良いんだっけ？俺は世間話するくらいなんだけどモロはどういう流れで山田と知り合ったんだ？」

そう聞くのは先日、今日から数えて5日ほど前の放課後に山田、まゆっち、武蔵による修羅場（ある意味）に巻き込まれた大和である。

なおその察知能力の結果、まゆっちは修羅場に放置されたのだが。

「うん。太郎とは割と仲いいほうだと思うよ？太郎もゲームとか漫画とか好きでね、僕とスグルと同レベルで会話できるしね。何より武蔵小杉さんをイジるとき以外はかなり常識人よりだからね、気が楽なんだよ。」

「マジで⁉…正直信じられないなあ。」

モロの返答を聞いて大和は二つの意味で信じられないという言葉をつぶやいた。

このモロとスグル、本名大串スグルはかなりマニアックなヲタクである。

そんな彼らと同等の濃いヲタクがこんな身近にいたということ、そして同年齢の女子高生へ一緒にハードエロゲをプレイしようなどとキチガイ染みた言動をする山田が意外と常識人であること、この二つに驚がくしたのだ。

「ん？大和は山田とは知り合いじゃなかったのか？意外だな。俺様もアイツとは結構前からダチだし、1年限定だけどアイツはかなり顔広いからな。人脈大好きな大和ならもう知り合いなのかと思っていたぜ。」

「いやさっきも言ったけど顔見知り程度なんだ。むしろ二人と友人だったり、実はあんなエキセントリックな一面があるとか全く知らなかったよ。」

「ふーん。意外だな。それにそう言うならキャップやワンコとも仲いいぞ。」
心底意外だ、という雰囲気でそういうのは島津岳人。
同じく風間ファミリーの一員で筋骨隆々の肉体にタンクトップという男くさい風貌の男である。なお彼の母親が経営する島津寮に大和やまゆっちなど風間ファミリーの多くが下宿していたりする。
「マジで!?むしろキャップと!?なんで!?」
大切な仲間が意外にも山田と縁が深いことにさらに驚き、地味に疎外感を感じてしまった大和は声を上げる。
大和は、キャップこと風間翔一は性格がよく美形男子で快活で人気者であるが、その極度に自由すぎる在り方から友人は多くとも逆に特別仲がいい友人など風間ファミリー以外はそうは居ないと割と失礼な分析をしていた。
「そういえば太郎もそんなことを言ってたね。なんか今でこそヲタク趣味全開で暮らしてるけど、昔一時期そんなものが一つもないジャングル奥地みたいな所で暮らしてたんだって。」
「そうそう。んでキャップも舌を巻くほどのサバイバル技術持ってたり謎の遺跡や変な生物と遭遇したことがあるらしくてキャップめっちゃ目をキラキラさせて話を聞いてたよな。」
「うん何でも人間サイズで猫耳の蟻と遭遇して酷い目にあったとか色々嘘っぽいエピソードとかあるらしいよ。」
「人間サイズで猫耳の蟻とか何だよ…。こう、クトゥルフ的なクリーチャーしか想像できないんだが…。」
大和のセリフにほかの面々も力強くうなづく。
今更だが此処は風間ファミリーの秘密基地がある廃ビルの一室である。
そして大和の言葉を聞いて脳裏に冒涜的かつ宇宙的なクリーチャーを想像している面々は
3年生
圧倒的な戦闘力と美貌を持つ美少女（但し中身はおっさん）である「武神」川神百代。

２年生
百代の妹にして先ほどの話にも名前が出てきた修行大好きっこの川神一子。
何処か冷たい物静かな雰囲気を持つ容姿端麗な大和の妻（自称）の椎名京。
転校初日に白馬で登校してきた日本を勘違いしているツンデレドイツ人美少女のクリスティアーネ・フリードリヒ。
である。
そこに加えて先ほどから会話に参加しているモロ、ガクト、大和、以前から山田と友人であるまゆっちとファミリーのほぼ全員が集合している。
（キャップは旅行中）
「なあ一子。その山田とは強いのか？どうにも話を聞いていると中々ユニークそうな奴だけど変人って印象なんだが。」
「うん！お姉さま！太郎はいいひとよ！だってよくスポーツドリンク差し入れしてくれるし、修行の応援してくれるもの！」
「おう！山田は毎日頑張って修行しているワンコのファンなんだとよ。変な意味でななくな！」
「なるほど。まあガクトも言うならそうなんだろうな。ファンまで出来るとは流石私の妹だ！褒めてやるぞ～!!」
「うにゅ～お姉さま～⁉」
一子の餅のようなほっぺたをこねくり回し愛でる百代。
そんな光景を微笑みながら見る京はボソッとつぶやく。
「私も珍しく山田とは話すかな？彼は私と大和の関係推進派だし凄く良いひとだよウン。」
「ファ⁉」
大和はファミリー以外の人間とは壁を作っている京がファミリー以外の人間と多少なりとも交渉があることに驚がく半分嬉しさ半分だった。
だが続く〝推進派〟という言葉に今日一番の驚がくを現す。
…しかし大和は今日一日で何度驚がくするのだろうか？

「な、なんだよ推進派って!?俺初耳だぞ!?」
「ああそりゃ大和本人には隠してるからね。実は京×大和推進派と否定派の暗闘が以前から学園では繰り広げられてるんだ。第三次大戦時には
『椎名京が直江大和のことを本当に好きだということはよく分かるから応援したい。つーかさっさと諦めてくっつけよアイツ。アイツが他の女の子に手を出しても彼女は絶対諦めないだろ？つまり男子に対して女子が一人減るってことだ。…あとは言わなくても分かるだろう、お前ら？』という名演説をして現在は推進派が優勢なんだ。」
「何言ってんのアイツ⁉モロ!!本当に初耳なんだけど⁉第三次って何⁉一次と二次があったのか⁉」
「自分もどちらかと言えば推進派だな。まあそんなことはどうでも良い。実はここに先日の東西交流戦をマルさんに編集してもらったＤＶＤがある。本当は２年の試合を見返して自分の反省をしようと思っていたのだが…せっかくだ、１年の試合も見て件の山田という男の動きを見てみないか？」
「「良いねえ!!」」「無視かっ!?」

キャップがどこかから入手してきたテレビの画面に若干ノイズがあるものの先日西の天神学園と東西交流戦を行った工場地帯が映し出される。
ちょうど１年生の試合が始まるようである。
画面の中では１年生の本陣には武蔵小杉を大将に周囲を山田も含めた優秀だと有名な人員で固めている。
多くはＳ組のようだが大和が知る限り他のクラスでも優秀と噂の生徒が多く試合に参加しているようだ。
見る限りこういった催しにあまり参加したがらない連中も多く参加している。
これが山田のコネの力ならば、なるほど彼と関係を深めればライフワークの人脈づくりは一気に進むだろう。
「結構有力な生徒が集まっているのだな。私でも噂くらいは知ってい

るが余りこういうイベントに積極的ではないものまで参加しているのはその山田何某の力なのか？」
「いえクリスさんそれだけではありません。大将の武蔵さんのカリスマのおかげもあります。武蔵さんは入学早々有力な生徒と正々堂々と決闘して周りに力を認めさせていきました。まあ武蔵さんは正直強引な部分もありますが、そこを山田さんがフォローを行うことで1年生に対して絶大なカリスマ性を持つに至ったのです。」
「なるほど。将のカリスマか…。具体的にはどうしたんだ、まゆっち？」
「はい。武蔵さんは決闘するまでは強引な部分もありますが、まず決闘自体は正々堂々お互いに有利不利が無い内容で行ったこと、そして山田さんから武蔵さんが決闘に勝つために様々な分野を日夜努力を重ねていることを周囲に広められたことから決闘相手だけではなくそれ以外の多くの生徒にも認められています。」
「ほほう。」
「あとは日常的に武蔵さんが山田さんにイジられて…その…畏怖だけではなく親しみを持たれているからですかね。」
「ゆるキャラ的な、な！」
「カリ…スマ…？」
二人と友人であるまゆっちの解説にクリスは納得の意を示す。
だが続く松風の一言を聞いて首をかしげてしまった。
「お！試合が始まったみたいよ！お姉さま!!」
微妙な空気の中、試合が始まったことを告げるワンコの声を聴いてみんな画面に意識を集中させる。
画面の中でまゆっち他各将に率いられた部隊が天神学園陣営に切り込んでいく。
撃破される部隊もいくつかあるがまゆっちをはじめ大部分の部隊が相手を撃破し本陣を包囲していく。
「さすがまゆっちだぜ！圧倒的じゃないか我が軍は!!」
「は、恥ずかしいです。」
「もっと褒めたたえてもええんやで？ガクトＢＯＹ？」

画面の中のまゆっちの快進撃をたたえるガクトに顔を赤くするまゆっち。
そして1年生の本陣でも動きがあったようだ。
見ると山田が画面で見ていても気づくと見失うような気配の薄さで一人敵本陣へ斥候を行っていた。
その動きは機敏で影などに潜むとそこにいると知っていても全くわからない。
まるで暗殺者か忍者のようである。
「どうやら斥候して相手の位置を本陣に伝えているようだね。まるでＮＡ○ＵＴＯみたいだ。」
だがそんな活躍も大将である武蔵小杉の一声で止まる。
『突撃!!突撃～!!』
敵本陣の位置を山田から伝えられた武蔵小杉が自ら部隊を率いて進軍しだしたのだ。
『ファ?!』
優勢な状況で大将が先頭に立って敵陣に乗りこむ。
まったくもって意味不明である。
「…なんで?」
軍師役の多い大和も分からない。
「…おそらくテンションが上がったから?でしょうか?」
「えぇ…」
『えぇ…。』
画面の中の山田と大和のリアクションがリンクした。
『お嬢は何考えてんだ⁉…いやテンションに任せて何も考えていないな、ありゃ。』
言うや否や武蔵小杉の方へ駆け出す山田。
その速度は明らかに常人の出せる速度ではない。
「⁉早い!これ程とは?!」
「しかもどうやって居るのか分からないけど正確に敵の位置を把握してるみたい。」
画面の中ではシューティングゲームのように的確に敵部隊を避け

る山田。
だがそれは平面的に俯瞰している側だから言えることで、実際にはパイプやダクトなどが入り乱れて山田から敵部隊を物理的に視認できない場面もあった。
だが山田はどうやってか敵部隊を察知し戦闘を回避しながら武蔵小杉のもとへ駆けていく。
「……」
そうしてしばらく進んでいくうちに
『キャー⁉ピンチ？プッレ～ミアムにピンチだわ⁉』
武蔵小杉の緊張感のない悲鳴がこだまする。
それを聞いた山田はついには回避することをやめて武蔵小杉まで最短距離をさらに速度を出して駆ける、いやパイプなどを足場にパルクールじみた動きで宙を舞うその動きはすでに跳んでいると言って良いだろう。
そしてあと少しで武蔵小杉と合流できる位置まで来たとき、遂に敵生徒と会敵してしまったのだ。
『！ほう中々の速度！良いだろう‼この次期十勇士である天神学園1年三よ…』
だが腕の立ちそうな敵生徒は山田とすれ違う瞬間、糸が切れたように倒れこむ。
「倒れた⁉何があったの？」
画面越しに見ていたワンコには敵生徒が勝手に倒れたようにしか見えなかった。
そしてそれはほかの面々も同様であった。
「手刀だ。」
「…はい。」
「「⁉」」
いや二人、百代とまゆっちだけは山田の動きをとらえることが出来たようだ。
これは山田の動きを捉えられた二人を褒めるべきか、それとも画面越しにもかかわらず常人には見切れぬ速度を出す山田が凄いのか。

「恐ろしく速い手刀　私やまゆっちじゃなきゃ見逃しちゃうね」
どこかの殺人嗜好者のようなセリフをはく百代。
種明かしするなら山田は単純に常人では視認不可能な速度で手刀を繰り出しただけである。
驚くべきはその速度と走りながらそこそこ強そうな相手に正確に手刀を当てれる山田の技量だろう。
「…凄い。」
誰とも言えぬ感嘆の声が室内に響く。
しばらく山田の駆ける姿を眺めていると、対象である武蔵小杉が打ち取られて試合終了の合図が出される。
画面の中の山田は速度を緩めて立ち止まりボソッとつぶやいた。
『まったくお嬢は…お仕置きしなきゃ（白目）』
その声を聴いたガクトとモロは何を思い出したのかだらしない笑みを浮かべ、まゆっちは頬を赤く染めた。

3話

山田太郎の朝は早い。
が、今日は珍しくいまだ山田は夢の中であった。
これも昨日深夜まで先日の猫耳コスプレも含めた「武蔵小杉写真集～16歳のわたし～」の編集をしていたからだろう。
山田がこの世界に転生して16年。
かつての自分、カルスが三十路手前だったころのことを夢に見ていた。
ます最初の世界ではどこにでもいる一般人だった。
名前はほとんど覚えていないが「山」という感じが入っていた気がするので今生ではソレにあやかって山田太郎と名乗っている。
そして最初の人生で、ある夜に眠って起きるとHUNTER×HUNTER」の世界へと転生したのだ。
自分が生まれた当初、流星街のストリートチルドレンからのスタートで自分の将来に絶望したのもいい思い出だ。
因みに最初の世界では24歳、2度目の人生は30歳くらいまで生きた。
さて今思い返すと己の前世であるカルスは「HUNTER×HUNTER」の世界ではいわゆる二次創作のオリ主のようなチート持ちであった。
例えば常人よりもかなりオーラ量が多く、また身体能力も高かった。
また「念」や格闘についての才能も他人の何倍もの、所謂天賦のモノを持っていたのだ。
故に俺TUEEEE出来るかと思い調子乗って生きた。
その結果、脅威本位で原作を辿ってみてゴンやキルアのような本物の天才に心折られ、何故かネテロ会長に気に入られこの世とあの世をメドレーするかのような修行を課せられたのだ。
さて少し話は逸れるがカルスの念能力を説明しよう。
カルスは強化系だ。

初めて水見式を行ったらブクブクと水があふれたから間違いない。
そして俺は流星街という得体のしれない薬品などで汚染された土地で目覚め、当初は1日最低1回は死にかけていたこともあり最初期から無意識的に下記のような発を組み上げていた。
【戦闘民族の遺伝子／サイヤ・ジーン】
強化系の能力で色々と制約はあるものの怪我や病気などで死にかけて治癒した場合、死にかけた原因への微弱ながら耐性、そしてオーラ量も含めた身体の機能を永続的に強化する能力である。
これのお陰で元々の才能に加えて様々な毒素への耐性、そして圧倒的オーラを得ることとなった。
※身体能力も圧倒的チートであるが大気中にプロテインが混じってそうなＨＵＮＴＥＲ×ＨＵＮＴＥＲ世界では稀によくいるレベルである。
１２歳ころにハンターとなり幻獣、特に蟲系統の駆除に全力を傾けながらも可愛い女の子とイチャイチャしたり妙にレベルの高いアニメやゲームを楽しむなど充実した生活を行っていた。
そして２０歳ころだろうか？
これまでのハンターとしての成果を認められてシングルハンターになった。
そして様々な人から敬意の目で見られ、以前よりも可愛い女の子にモテモテになった。
その結果、…俺は有頂天になって…ハンター試験を見に来ていたネテロ会長に目を付けられることになった。
①▪何故か俺に興味を持ったネテロの捕まる。
②▪なんやかんやあって修行という名のごうも、かわいがりを受ける（白目）
③▪ボロボロのヤムチャ状態になる→回復→強化→ネテロの悪い笑み
④▪逃亡→捕縛→③へ
これが原作開始からキメラアント編までの基本ルーチンで、ここにパリストンから笑えないレベルで死にかける嫌がらせが入ることが

ある。
個人的には流星街よりも酷い環境であった。
だが極めつけはネテロ会長がメルエムと戦うために護衛軍４人と連戦させられたことだ。
どうも俺以外の憑依だか転生者だかが複数介入した結果、
俺、キルア、モラウ、ナックル、シュート、メレオロン、転生者と思われるクーフーリン似のイケメンに対して、
ピトー、ユピー、プフそしてブムという熊男という総力戦となった。
…どうしてこうなった？

…少し人生の理不尽さを嘆いていたがもう大丈夫。
この世界にはあんな万国びっくりショーみたいなやつらは居ない。
※います。
正直死ぬと思ったし、ネテロ会長を殺してやりたいと思った。
まあクーフーリン似のイケメンが自信満々の割にあっさり死んだときは「ランサーが死んだ！」と思わず叫んでしまったものだ。
その後『この人でなし‼』とリアクションを返した熊男を倒したり、プフというパリストン亜種みたいなやつをキルアと組んで倒した。超がんばった
これまでの努力（別名･あの世とこの世メドレーリレー（強制））が報われた気がして、ここで久々に調子に乗った。
だが俺はすぐさま再度心を折られたのだ。
ノリに乗った俺は人間サイズの猫耳付けた蟻ことピトーさんにも優勢なまま動きを封じることに成功した。
なのでつい魔が差してピトーさんにキャットエンペラータイム（隠語）したいなあとか考える割と余裕すらあった。
※少し離れたところでユピーが全力で暴れています。

そして俺のトラウマとなったアレが来たのだ。
折角捕縛したピトーさんやユピーついでに熊男の死体をミンチよりも酷い状態にしていくアレ、『ゴンさん』である。
正直直前までピトーさんの整った顔を見てエロい妄想を膨らませていただけに、ピトーさんがミンチになっていくグロ画像と一人作画が違っているゴンさんのせいでＳＡＮ値直送である。
あれはだめだこころがしぬ。

――――――その後はいつの間にかハンター協会の会長選が終わっており俺は１２支んのプードルっぽい人にカキン王国の船で暗黒大陸へ連れていかれた。
そして航海中、王子たちが変形合体したりクラピカが「クラピカさん」になるなどなんやかんやあって俺は単独で無限海沿岸を流されて２年ほど暗黒大陸でサバイバルすることとなった。
あの時は常時泣き叫んでいるが目が死んでいた気がする。
５大災厄とも半分以上ニアミスしたしニトロ米らしきものも口にした。
この当時は何度も死にかけては生き延びることでネテロ会長と互角くらいまで急成長していた自信があるが、周りがエゲツナサ過ぎて全然俺ＴＵＥＥＥ！な気分を味わえなかった。
最初は様々な特性を持つ何万ものキメラアント（昆虫サイズ）に襲撃された「巨大蟻塚」
次は物質と非物質の狭間を揺蕩う「境界の森」で半年くらい迷った。
時間の流れがめちゃくちゃで速度どころか方向ですら瞬時に切り替わる「何もない平野」
動く菌糸類に支配された山、機械のくせにオーラどころか念能力すら使用してくるロボットが永遠に製造され壊され続ける古代都市、他にも重力、温度、大気そのすべてが生物を殺しに来る地獄であった。
…最後は確か傷を瞬時に癒しオーラ量どころかメモリすら増やすほどの効果を持った黄金のリンゴを見つけて食ったなあ。
まあ食った直後にリンゴがなっていた木そのものに逆に捕食され

て長いこと苗床になったが。こういうのは俺みたいな男ではなく可愛い女の子のほうがいいと個人的は思う。
この時俺は先に述べた古代都市から持ってきた遠隔操作のロボットを使用してリンゴを回収、何キロも離れてから食べたのに次の瞬間体の制御を完全に奪われてリンゴの木まで自分で進んでいき取り込まれてしまった。
意識はハッキリあるのに体の感覚はなく、木の養分として少しづつ胃や心臓、肺などが消しゴムで消すかのように欠けていく恐怖。
眼も鼻もなくなりやっと死ねるかと思えば再度リンゴを食わされて完全に回復、再度養分を吸われて、またリンゴ。
リンゴ、養分、リンゴ、養分…ｅｔｃ
意識はあったので気が狂わないように考察していたがアノ樹木はリンゴを餌に電波などではなく、直感だが俺とロボットの間にあった「縁」のようなものを辿って俺の身体の制御を奪ったのだろう。
縁とか意味わからない。
無理ゲーというかデバック前のバグゲーの類だろう。
そして樹木によるリンゴで回復、オーラを吸収、苗床という凌辱エロゲーのような永久機関、つまり俺にとっては地獄が始まったのだ。
まあ樹木にとっての誤算はこの地獄の中でも俺の精神は死なず延々とリンゴを喰らうことでメモリが増え続け強化されていったことだろう。
端的に言ってある日リンゴで回復した瞬間、増えたメモリに物を言わせて新たに能力を作ってオーラを吸われる前に樹木を巻き込んで自爆したのだ。
そしてどうもメモリは腐るほどあったから無意識に転生用の能力を開発していたようでこの真剣恋の世界に転生することが出来た。
そして俺は１６年前にこの世に再び生を受けたが１２歳ころに実家を飛び出した。
どうにも俺の家は名のある武術の名家であったが以前の俺は落ちこぼれだったらしく虐待ではないがどうもネグレクトされていたようである。

お嬢は覚えていないがこの大変だったころ俺は武蔵小杉と出会い助けられたのだ。
擦れたＨＵＮＴＥＲ×ＨＵＮＴＥＲ世界の住人や暗黒大陸の鬼畜リンゴは勿論、この現代社会で身寄りのない子供であっても避けられない厳しさを知る俺にはお嬢の裏表ない善意は劇薬過ぎた。
「さてそろそろ起きるか。」
そうして俺はカルスから山田太郎となり、お嬢をイジることをライフワークとした一人の紳士が誕生したのだった。

【戦闘民族の遺伝子／サイヤ・ジーン】
・強化系能力
毎度毎度死にかけたくないというカルスの欲望と記憶に残る強者の代名詞であった某野菜人の設定がジョグレス進化して生まれた能力。
種類問わず一定以上の生命活動に対する負債を負った際、回復した後にその負債の大きさに応じて微弱な耐性や身体機能、潜在及び顕在オーラ量を増加させる能力。
持ち前の才能と細かな制約を幾つお掛けることで効果を増しており、その強化率は中々なものである。
但し現在は使用不可。
〈制約〉
・強化を目的に故意に負った負債は除外する。
・軽度の負債は除外する。
・念能力を使用した治癒を行った場合は強化されない。
・自分の意志でＯＮ／ＯＦＦできない。
・ＨＵＮＴＥＲ×ＨＵＮＴＥＲ及びドラゴンボールという漫画を読んだことがある。
〈誓約〉
・特になし

【禁断の果実／キチク・アップル】

・特質系能力

自身の人格、記憶、オーラ及び身体の要素情報を引き継ぎ生まれ変わる。

現在は使用不可。

〈制約〉

・転生先及び転生後の状態はランダムである。

・死が確定した状況でしか発動できない。

・5歳の誕生日に引き継がれる。それまでに死亡した場合能力は無効となる。

〈誓約〉

・発動した際にこの能力も含めた覚えているすべての能力が使用不可能になりメモリも回復しない。これは転生後も継続する。

４話

最近山田は自分周辺の環境の変化に戸惑っていた。
小杉とは小学生高学年からの付き合いであるがその頃から今と同様に連るんできた。
中学生時代もポンコツではあるが才覚に胡坐をかかず努力を重ねる小杉はめきめき頭角を現し学年どころか学校のトップを三年間張っていた。
もちろん自分も彼女のために色々と協力したものだ。
武術を重んじるこの川神では特に喧嘩沙汰も多くそういった方面での協力は勿論、能力は高いくせにポンコツな彼女の人間関係的な方面でのフォローも多かった。
小杉は上昇志向が高い。
まず新興の勢力である武蔵家全体に言えることで歴史の長い名家である不死川や綾小路、世界のＴＯＰをひた走る九鬼に追いつけ追い越せと日夜精力的に動いている。
そんな一族の中で子供の時から育ってきた小杉は、そういった武蔵一族の性質を体現しているのだ。
故に野心家の習性ともいうべきか、障害となるものを積極的に排除しようとしたり、一般的に評価の低い、利益のないモノを軽視する傾向が小杉にはあるのだ。
俺自身ハンター時代はグレーどころかブラックなことをしていたのでそれが悪いとは思わない。
だが昔の俺を助けたように根は善良なので俺が注意したりフォローを行うことで小杉の性格を矯正してきたのだ。
中学時代は小杉が過剰なことをした場合は制止したり謝罪させたり、俺が小杉の努力を広めたり、あえて、そうあえて！俺が小杉をイジることで彼女に対して周囲の皆から親近感を持たせたりと、陰日向に彼女のフォローをしてきたのだ。
だが…先日の東西交流戦を終えて、いつも通りの日常が戻ってくるという山田願いは叶うことはなかった。

「さっすが紋様！プレミアムに素晴らしいですわ!!」
「フハハハ‼まあな‼我は九鬼だからな‼だがムサコッスのお陰でもある！感謝するぞ！」
「そんな⁉とても光栄ですわ！紋様‼」
この有様である。
先に述べた武蔵一族の習性であるが、もう一つある。
それは明確に上のモノに対しては後で下克上してやるという意思を持っているものの、見事に、それはもう見事に媚びへつらうのだ。
今山田の目の前で、数々の決闘を経て自分から1年生のトップを奪った九鬼紋白を全力でヨイショする武蔵小杉のように。
「お嬢・・・（´・ω・、）」
九鬼紋白
世界に名だたる九鬼一族の末子で、2年生に在籍する九鬼英雄の妹でもあるロリ美少女である。
東西交流戦を終えてから最初の月曜日、九鬼主導の「武士道プラン」によって生まれた過去の英雄のクローン「源義経」「武蔵坊弁慶」「那須与一」「葉桜清楚」と共に入学してきた。
そしてその優秀さとカリスマ性からすぐさま1年生を掌握、小杉を下しわずか数日で完全に1年生のトップに収まった傑物である。
だがいくらなんでも今の小杉の太鼓持ちっぷりに先週までの彼女を知る山田は悲しみを覚えてしまった。
「山田さん…気を落とさないでください。」
「まゆっち、まゆっち！今のムサコッスを写真に撮って『盛者必衰』って題名付けたらピッタリじゃねえ？」
「こら！松風！確かに清々しいほどの手のひら返しですが失礼でしょう！」
「後生だから止めたげてよぉ。」
何気に酷いことを言うまゆっちと松風の心の闇を気づかないふりをしていると、1年生の優秀な人材たちの視察を行っていた小杉と人材マニアの紋白、そして明らかにお前1年生じゃないだろ！という外見の老年の金髪執事、ハゲがやってきた。

「ん？そこにいるのは山田太郎ではないか‼まずはおはよう‼」
「おはよう。紋白さん今日も元気ですね。」
「当たり前だ‼上に立つものに覇気がなければ下の者も覇気は出ぬ。上の立つものはかくあるべき理想を普段から体現せぬとな!!」
なんとなく話した言葉から予想外に深い理由が返される。
流石は九鬼。
上に立つものとして、器の大きさが違う。
…山田は割とマジで「お嬢に爪の垢を食べてもらいたいなあ」とか考えた。
「こら！太郎！紋様に対してその気の抜けた返事は何なの⁉」
「後てめえ紋様を呼び捨てだあ？俺ですらしたことねえのに何チョーシこいてんだァ⁉こらァ⁉羨ましいだろうがァ⁉」
「よいよい。他者に強制された敬意は本物ではない。これから我の器を山田に見せていけばいいだけのこと、それに悪気がないとはいえ自身の主が下されたのだ。隔意があってもしょうがあるまい、良い従者であるなムサコッス‼」
「そ、そんなことは⁉」
やべえ。マジでカリスマがあるな。
本当お嬢勝ってるところ年齢以外ないんじゃないか。
今度本当に爪の垢くわせるかなあ」
「ちょっと太郎⁉何考えてるのよ⁉プレミアムに不穏なことを言ってないかしら⁉」
「何い紋様の垢だとぉ！誰がやるか！紋様の爪の垢なんざ俺が欲しいくらヴぁああ⁉」
「フハハハ‼山田は面白いやつだなあ！」
山田はつい内心を露呈してしまった。
ついでに爪の垢発言で気持ち悪いこと言っていたハゲはヒュームさ…ヒューム君に粛清されて倒れた。
何故だろう。
好感度を稼ぐイベントなど欠片もないのにハゲに対する親近感が何故か高い。

とりあえず気付けを行って介抱するとしよう。
「紋白さんは流石のカリスマ性だ。お嬢に本気で見習わせたい位だよマジで。後、俺はお嬢の従者でなくて友人だよ。」
「そうなのか？んー？では山田も九鬼に仕えぬか？我の人材センサーに山田がただモノではないと反応を示しているのだ！」
「んー。本気でありがたいですが俺、まだそういうのは考える気がないので。」
「フハハ気にするな。高校卒業後の進路の一つにでも考えておいてくれ。我のセンサー通りならば山田が九鬼に入ってくれればきっと九鬼は更なる躍進をするだろうからな!!」
「…本当にありがとうございます。でも俺将来はお嬢の旦那さんかご主人様になっている予定なので…」
「⁉ちょっ太郎何を言ってるのよ⁉初耳なんだけど⁉」
顔を赤く染めてアワアワする武蔵小杉。
『ご、誤解です紋様～』とか言って腕を振る彼女の姿に山田の心は満たされる。
今日も強く生きていけそうである。
「お嬢のご両親からも『山田君なら収支的に見てもプラスになるし小杉も嫌ってないから良いんじゃないかなあ。でも無理やりは駄目だよ？』と言われてますし。」
因みに今のご主人様云々の話は嘘である。
実は山田はまだ子供の頃に一度小杉の両親に「娘さんが欲しい」という旨の話をしたことがあるのだ。
しかし、その際小杉ママにはＯＫを貰えたが小杉パパには猟銃でお返事された。
それからというもの偶にどこからともなく弾丸が飛んでくる度に、銃弾を回避、なんとなく小杉パパの枕元に回収した弾丸を転がしておくのが山田の日課となった。
「本っ当に初耳なんですけど⁉」
「ほえー山田とムサコッスはア、アダルティな関係なのだな…」
紋白も小杉と同様に顔を真っ赤にしつつも興味津々である。

中々威力が高い。
素晴らしい。
山田はその顔を見て『お嬢には負けるが紋白もイイなあ』などと慈愛顔を浮かべていると
「良い仕事だ。山田。お前、俺と同類…ではなさそうだが仲良くできそうだ。俺は2―Sの井上準っていうんだ。よろしくブラザー！」
復活したハゲ…改め同じく慈愛顔で顔を赤く染めた紋白を眺める井上準。
一瞬で険悪→友→ブラザーにまで仲が進展したが、山田も彼に何かしらシンパシーを感じていた。
「こちらこそよろしくお願いします。井上先輩。俺たち向かう場所こそ違えど色々と共通点がありそうで…気が合いそうですよね！」
「ああ！だが先輩なんて他人行儀だ。準で良いぜ俺も太郎と呼ぶからな！」
「！ああ準よろしく！」
ロリコンとドエスの最悪の変態タッグがここに結成された。
二人は固く握手を交わし、顔を赤らめて小杉を興味津々に問い詰める紋白とそれに〝はわわ〟っという感じで答える小杉を二人して悟りを開いた聖人のような顔で眺める。
まさにこの世に苦しみなどないというかのような穏やかな表情だ。
「…とりあえず紋様に不躾な視線を向けたお前らには俺がお仕置きだ。」
「!?」
だがしかし、現実ではこの世には悪意も不条理も多く存在する。
不愉快な視線で主を視姦する変態二人を排除せんとヒューム君、何故か高校1年生として無理のある入学を果たした世界最強格のジジイ、ヒューム・ヘルシングが牙をむく。
「なんで『そんな馬鹿な』って顔を自信満々に出来るか理解できんが、とりあえず潰れろ。ジェノサイド・チェンソー（弱）‼」
「あべし⁉」
「ひでぶ⁉」

「⁉ほう…やはりただの赤子ではないか、山田太郎。」
ヒュームのジェノサイド・チェンソー（弱）を受けて再度気絶する準。
そして瞬間的に気を纏い、「堅」を行って、攻撃を防ぎ切った山田。
完全に（視姦に夢中で）気を抜いていたがゆえに条件反射で念を使用してしまった山田は表情は変えず、だが内心ではかなりパニクっていた。
（しまった⁉油断しすぎた⁉これは…ごまかせないな。だが実力の全ては察知できないはず。最悪さえ避ければいい！）
「…まあお嬢を守るため、そこらのチンピラはもちろん、お嬢よりも強いですよ俺は。まあ今のは運がよかった。咄嗟に防御したら上手い事耐えきれましたからね。」
「ふん、もう1時間目が始まる時間だ。今日はそういうことにしておいてやろう。」
全く誤魔化せなかったが、少なくとも最悪は避けられた。
俺が武神よりも強い可能性があることは。
「…」
時間も来たので、この場はそのまま御開きとなった。
小杉たちは連れ立ってSクラスへ、山田は一人でBクラスへ戻る。
廊下に残ったのは奇妙な体勢で気絶する準だけだ。

1時間目が始まり、真面目に授業を受ける山田。
山田は自分がそこまで頭はよくないと考えている。
念能力の分析など戦いについては頭が回るし仕事や経済についてもHUNTER×HUNTER世界ではそこそこの成功は収める程度には知識と適正があった。
学校の勉強についても実は本気を出せばAの上位かギリギリSクラスまで行けるのだ。
だが迂闊というかすぐ楽な方向へ思考が向かうためよく失敗する。
だから彼のかつての念能力【戦闘民族の遺伝子／サイヤ・ジーン】も余計な選択肢を生まないように頭をあまり使わない能力で、典型的な

ＬＶを上げて物理で殴るスタイルであった。
そんな単純思考な山田であったので、今回のような場合はどうするか？
（致命的ではない。だから悩んでも良いことないし忘れよう。そうしよう。）
都合の悪いことから目を背けて、流されるままになることである。

後日、山田はこの判断を後々悔やむこととなる。
具体的には武神をはじめとした実力者とガチで戦うこととなった時に。

第5話

九鬼紋白やヒューム君を迎えて既に2週間近くが経過した。
その間色々とゴタゴタしたものの既に1年生は落ち着きを取り戻していており、
山田は小杉も用事でいないある放課後、一人スマホでエロゲ情報を閲覧していた。
「おーい！山田暇だったら梅屋に寄ってかないか？」
「ん？行く行く！今日はお嬢は習い事だし予定も特にないしな。」
「おうよ。お前いつも武蔵にべったりだからな。こういう機会にでも親睦を深めるっていうの？男同士の友情を深めようぜ！」
「ありがとう。…本音は？」
「山田様顔広いですよね？美少女を紹介してください※ただし巨乳に限る。」
「…うん。そういうまっすぐな所好きだけど女の子には絶対言うなよ？絶対だからな？川田。」
珍しく予定のない山田は同じクラスの川田、名字が似ているという理由だけで話し始めた、と共に梅屋に行くこととなった。
学校を出て、変態橋を渡り、商店街の中にある梅屋へと到着した。
この梅屋は安価の割にうまい丼物や定食類を多種提供しており山田もよく来る場所である。
まあ最近は厄介事の匂いがしてきたため足が遠くなっていたのだが、久しぶりに妙に食いたくなってしまったのだからしょうがない。
「いらっしゃいませー。こちらの席に…なんだ山田じゃねえか。」
足が遠くなった理由。
元川神流師範の釈迦堂刑部である。
彼は素養に恵まれてかつては川神流師範という武術界でもトップクラスの位置にいた人物でもある。ただし、彼自身の性分から川神流を袂を分けてからは鍛錬を怠り、定職にも就かないまるで駄目なおっさん、略してマダオになっていた。
それがどうゆうわけか真面目に梅屋でアルバイトを始めているの

だ。
　おそらく九鬼紋白や武士道プランのクローンたちが入学する直前の頃だったし九鬼が何かしたのだろうと予想している山田であった。
「どうもご無沙汰です。釈迦堂さん。あと一応お客なんで接客態度改めないと…ヒューム君にあることないこと告げ口しますよ？」
　夏前だというのにうだるような暑さの屋外から冷房の効いた店内に入る。
　山田はとりあえず釈迦堂にジャブ（精神）を放ちながら川田と店奥のテーブルに座った。
「最悪だなてめえは⁉」
　なお川田はメガネ男子なため、店内に入った瞬間温度差からメガネが白く曇り、それをふき取る作業で釈迦堂の鬼の形相を見ることはなかった。
　運がいい。
「川田。丁度いいから紹介するけど、この人は釈迦堂さんっていうマダオ…いやバイトしてるから元マダオか。顔は怖いし手も早いけど面倒見のいいひとだよ。」
「そ、そうなのか？話の前半と後半が全くかみ合っていない気もするけど…。山田の友人の川田満です。よろしくお願いします釈迦堂さん。」
　そういって少々ビビりながらも礼儀正しく自己紹介する川田。
「おうよろしくな、川田。俺は釈迦堂刑部ていう。…山田と違っていいやつじゃねえか。ほれ、生卵サービスしてやる。」
「⁉ありがとうございます！」
「あれ？俺と対応が違いませんかねえ？」
　基本礼儀正しく、なんというか舎弟感全開の川田は釈迦堂に気に入られたようだ。
　気が合いそうだなあっと思いながらも自分への対応との明らかな違いに複雑な心境の山田である。
　まあ釈迦堂がヒュームにしばかれ強制的に働かされた場面に立ち会い、ことあるごとにヒュームに告げ口する山田が悪いのだ。

ついでに釈迦堂が戦いに誘ってもいつのまにか山田が姿を消すというのも一因である。
この時、山田は割とマジな絶と円を使用して逃げている。
（メモリもあるのだし何か便利な発を作るのもありか？でもなぁ…。）
山田はこの世界に転生するための代償として当時使用できた発を全て使用不可という重い対価を支払っている。
だが己の死因ともいえる〝リンゴ〟の影響で発の開発に必要なメモリは大量に余っている状況なので新たに開発する分には全く問題ない。
では何故能力によっては戦闘にもそれ以外にも有効な発を開発しないのか？
それには以下のような理由があった。
オーラ≠気
コレである。
転生した当初、まず山田は己にできることを検証した。
その際何の気なしに纏・練・絶…ｅｔｃと基本も応用も一通り試した。
そしてその後はこの世界の武道家の扱う気を調べた。
その結果は「似てるけど違う」である。
①　纏・練・絶…ｅｔｃなどはオーラ、気どちらでも可能。ただし形状の変化はオーラのほうがしやすい。気では円などのように薄く広く伸ばすなんてマネは相当実力がないと難しい。
②　気は炎や電気など性質変化は容易く（※それでも一部の上位者だけ）、オーラではおそらくキルアのようにそういった発を開発しなければ変質できない。
③　オーラを込めて殴っても念に目覚めない。もしくは目覚めにくい。
但し目覚めさせる意思を込めれば目覚める（制御できるかは本人次第。）
④　とある場所で裏社会のよろしくない人間相手に実験した結果、自分もこの世界の人間も「オーラ」と「気」の両方を持ってはいるが

基本武道家もオーラには目覚めていない。
⑤　自分の気の量は一般的な武道家程度だがオーラ量はおそらくメルエム最終形態と同等。但し開放すると転生のせいなのか死者の念もしくはヒソカ（勃起時）並みに禍々しい気配を放ってしまう。
なお、比較参考として、（総合力）・ネテロ会長＝川神鉄心、（オーラ（気）の量）：メルエム最終形態＝百代
百代ェ。
素で公式チートのメルエムさんと同等の気ってどういうことなんですかねえ。
まあ現状気の量が多いだけで技術も気概もゴミのようなものだ。
それこそ文字通り片手間でも対処できる。
…まあ真面目に鍛錬すればゴンかそれに少し劣るくらいの才能は有りそうだからすぐに成長するだろうけど。
…メルエム並みのオーラ量のゴンってゴンさんじゃねえ？
よし彼女は怒らせないようにしよう。
閑話休題
この通りオーラはこの世界において基本的に普及されておらず異物なのだ。
故に発などの分かりやすい形で使用していいモノだろうか？
余計な混乱…はまだしも余計に厄介ごとを呼び込んでしまうのではないかと山田は懸念していた。
まあ発を作らなくても大概の相手なら倒せる、殺すならもっと楽に出来るので戦闘面では無理に作らなくても良い。
個人的には小杉にイロイロ出来る口実になるでビスケのクッキーちゃんとか欲しい。

「まあ川田今からいうことをよく聞くんだ。」
「ん？どうしたんだ？」
「実は釈迦堂さんには４人ほど面倒を見ている兄弟がいてな…」
とりあえず山田は先ほどの川田の希望にこたえることとした。
「ドエスだけど色気むんむんな女王様系お姉さま」

「のんびりしている巨乳（重要）な大型動物系お姉ちゃん」
「ツンデレ強気系ロリ」
「頼れる親分系かつ超肉食系」
とそれぞれ個性が際立っており皆系統は違えど顔立ちは整っている。
紹介してもらえば、川田の好みは分からないが一人くらいはストライクな奴がいるのでは？と川田に伝えてみる。
するとその話を聞いた川田は偉く気をよくして
「正直期待してなかったけど山田、いや山田さん凄いっすよ。マジリスペクトっす。特に巨乳お姉さんとか超肉食系お姉さんとか最高っすよ‼」
喜びのあまり知能指数が極端に下がってしまった川田。
完全にチンピラである。
「…ああ喜んで貰ってオレも嬉しいよ。」
「…ああん？超肉食系…お姉さん？」
釈迦堂さんが何か違和感を感じているようだ。
大丈夫！前半三人は間違いなくみんな美女と美少女だし、４人目も嘘はついていない。
勝手に川田が勘違いしただけだ（白目）。
まあ実物みても４人目以外は普通に感謝されるレベルだからちょっとしたイタズラで済むだろう。
「さて食い終わったし俺は帰るよ。釈迦堂さん、川田に板垣さんたち紹介してあげてくださいよ。彼恋人募集中なので」
「ちょ、お前待てよ⁉」
「釈迦堂さん！ボク川田満って言います‼早速板垣さんについて詳しく‼姉妹何ですか？美人ですか⁉」
「おい！お前何か勘違いしてないか⁉畜生！やっぱり山田の同類か⁉碌なもんじゃねえ!!」
山田はクールに去るぜ。

次の日

「…ねえ山田。」
「はい…お嬢なんでしょうか？」
「なんで川田はあんなドブ川が腐ったような目で貴方を睨んでいるのかしら？」
「…さあ？」
「今の間は？正直にキリキリ話しなさい‼あんな濁った眼で見られては折角の朝がプレミアムではないわ‼」
少し焦った様子の小杉に胸元を捕まれガクンガクンと揺さぶられる。
少し苦しいのは揺さぶられたせいだろうか、それとも心痛だろうか？
「彼が恋人がほしいといったので板垣姉弟を紹介しました。」
「？それだけ？板垣姉弟ってあの４人組でしょう？ガラは悪いけど貴方の紹介なら暴力とかは振られないでしょうし、他に何かやった？」
「いえ天地神明に誓ってそれだけです。」
小杉が不思議そうに首をかしげる。
（小動物のようで可愛い。お持ち帰りしたい）
山田がそんな小杉を見てほっこりしていると、ついに我慢出来なくなったのか負のオーラ（※死者の念ではありません。）をまき散らしながらドスドスと足音を立てて川田が近寄ってきた。
「山田⁉お前だましやがったなあぁぁ⁉」
「だました？何のことですか？僕が紹介した通りの４人だったでしょう？まあ多少柄が悪かったかも知れないですが全員美形と言っても差し支えなかったでしょう？」
「ああ美形だった。美女に美少女で嘘はなかったさ！だが４人目は、よりによって超肉食系が男じゃないか⁉しかも同性好きの⁉何故騙した⁉おかげであの後板垣さん家に御呼ばれした俺が竜兵さんにどれだけギラギラした目で尻を狙われたか⁉どれだけ、どれだけ怖かったかっ…う、グス。」
遂に泣き出してしまった。
流石に悪いことをやってしまったか、珍しく山田は心底の謝罪を

行った。
「ご、ごめん。でもお前一日で板垣さん所御呼ばれされたのか？コミュ力高すぎだろう？」
「うう、まあ何事もなかったから良いけどさあ。いやまあ確かに亜巳さんたちは素晴らしい美女美少女ぞろいだったし、巨乳だったし、エロかったし、あ、天ちゃんは（胸が）小さすぎて残念ながら将来に期待だけど可愛いよね！後皆不良っぽい雰囲気が少し怖いけど良い人たちだったな！でもそこに常時俺の尻を狙うガチムチいるのって無いだろう！せめて事前に教えてくれれば心の準備が出来たのに⁉」
「…大体事情を察したけど、そこまで怯えてても事前に知っていれば心の準備して行くのね。よく分からないけどプレミアムだわ。」
「思ったより余裕ありそうですね。それじゃあ川田君は幸せそうなんで自分の席に戻って一人で壁に向かって語っといて貰えます？俺今お嬢を愛でるので超忙しいので…あ、お嬢そのテレ顔イイよぉ～。それじゃあ次は大胆に上目遣いとかしてみようかぁ～？」
「酷い⁉」
この後めちゃくちゃ小杉を愛でた。